



小特集「襖・屏風下張り文書の保全と活用」を読んで(LINK を読む)

内田, 俊秀

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 13:134-136

(Issue Date)

2021-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81013402>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013402>



LINKを読む

小特集「襖・屏風下張り文書の保全と活用」を
読んで

内田 俊秀

『LINK』12号で松下正和氏が企画した特集を読み、意見を求められたので、感想を綴る。特集の構成を見ると、松下氏の他に五名の方々が報告を寄せている。

表題にある「下張り文書」は、不用になった紙に遺された過去の記録である。このような古い書き付けに進んで触れようとするのは、日本史を研究する人以外は少ない。そして今、市民と呼ばれる人々が歴史資料館などに集まり、襖の下張りを剥がして伸ばし、整理し、研究者の知識も借りながらくずし字を現代文に変換し、例えば、二〇〇年前の人々の活動を、昨日のことにように物語るというような活動例が報告されている。この作業はかなり高い難易度と思われるが、最後まで成し遂げたことは評価されるし、しかも、参加している人たちは、竹のへらで紙を剥がしながら、季節の話や地域の話題に花を咲かせ、楽しんでいる様子も窺える。作業の報告は兵庫県からもあるが、山中さゆり氏と小山万里氏は長野市で真田宝物館という武士の館の説明ボランティア

の方々であり、延べ三〇〇〇名の方々と一緒になって、一〇〇点の襖を解体し古文書を取り出したという。

今後も豪雨被害などで襖の救出は各地で発生し「下張り文書の保全と活用」は続くであろう。以下、二つの課題について検討する。一つは、日本史の研究という面について考える。兵庫県佐用町の竹本氏の報告によると、襖の下張りの文書を剥がしとり、記述された内容を検討した結果、地元の河川を使つた江戸時代の運送に関する新たな事実が発見された。年貢米の輸送に関する詳細である。かつて日本全国で、自治体史編纂のために家々を回り、悉皆調査をかけた結果、古文書の所在場所がほぼ把握されたので、新しい発見などは困難と思われた。しかし襖の下張りには、解体されるまで人の目に触れないから、前述の悉皆調査では発見されなかった。また、阪神・淡路大震災以降、史料ネットの活動の一つとして始められた被災資料の救出活動は、日本史研究者が災害による資料の損壊や消失

を目の前にして、それらの救出に動き始めたものだが、ここでも「下張り文書の保全と活用」が生まれたといえる。

襖の解体作業は、多くの市民の手により実施され、これを欠いては不可能で、日本史研究者と市民の共同作業といえる。ここで研究者の役割を考えてみる。下張り文書の記述内容を理解しこれを地域の歴史の中に位置づける、背景の経済や政治、文化の動きのどこに位置するかを示すことであろう。別の言い方をすれば、資料の意味や価値を示すことである。これは、一般のボランティアの方々には、ちよつと荷が重い仕事だ。研究者としての訓練を受け、知識を備えた人の仕事である。研究者は地域に出かけていき、ボランティアの方々と話をし、彼らの仕事の成果の一部を提供してもらう。そして再び研究室などの仕事場に戻り調査を行い、この結果をボランティアの方々に提示する。この往復運動が今後必要だ。常識を揺るがすような発見は、そうそう期待できないが、地域の新聞紙上を賑わ

すことはあろう。ボランティアの方々の仕事も評価され話題になり、市民生活にも利益をもたらす。そして、各地での活動が繰り広げられ、県などの境をまたいで連絡を取りながら進み、様々な職業の人たちが混じりあい、自然な動きを大事にし、息切れをしないように時々休みながら、各地の特性に合った活動が展開されると思う。この結果、「下張り文書の保全と活用」が活発に動く地域には、文化遺産を中心に据え、土地の気質に合った、無理のない質の高い生活が実現するであろう。期待が持てる明るい話だ。

二つめに「下張り文書の保全と活用」が持つ社会に対する力や意味について考えてみよう。山内利秋氏は宮崎県延岡市にお住いの大学の教員であるが、活動の担い手や年齢層を美術館の講座参加者などと比較してみても、明るい見通しは少ないと感じているのが窺える。確かに、古文書講座を例にとるなら、高齢者の参加が目立っている。そこでこの事実については角度を変えて見たらどうだろう。年

齢層が高く、固定され気味という傾向は、この仕事は元々そういう性格の活動と考えればよいではないか。生涯学習を考えた場合、いろいろな活動分野があり、この活動は高い年齢層に向けたものと言えないだろうか。きらびやかな事象に飽き飽きした、いわばそれらをもう卒業した方々が取り組むのに値する数少ない種類の仕事と考えれば、社会的な意義は確定する。しかし、まだ課題は残る。新しい参加者も入らないと時間の経過に伴い人数が減少することである。この対策を考え出さなければならない。

「下張り文書の保全と活用」の具体例は古文書講座だけではない。もう少し広い視野から検討してみる。大規模な自然災害が発生した時、社会を復元する力が文化遺産にはある、と指摘するのは東北大学のJ・F・モリス氏である。⁽¹⁾氏によると、二〇一五年の「第3回国連防災世界会議」(平成二七年三月一四日～一八日)が仙台で開かれたが、ここでまとめられた宣言に書かれている。詳しくは、

モリス氏の論文を読んでいただきたいが、被災地では破壊されたインフラなどの復旧と同じくらい、文化遺産が被災者の復旧を支えるという内容である。私もこの見方には、賛成だ。

近似の内容と解釈できる事例が、この「LINK」12号の一〇三ページから始まる内田雅夫氏のレポートに見られよう。ここでは、過去の事例に学ぶという文化遺産の持つ力ではない、別の力が見えてくる。神戸市の東灘区に小字の単位で集まる人々が、個人や地区の様々な問題を解決する糸口を、文化遺産の活用機会を利用して発見するというものである。氏によれば、年に一度の祭りで地域を引き回す「山車」の運営に当たり、食事などの賄を担う地域の女性達の年齢層は広く、若いお嫁さんからベテランの主婦まで参加する。作業中に話される世間話は、結果として地域の様々な問題の解決の一端を担うという成果があると書かれている。襖剥がしの作業中にも同様の例がみられ、いわゆる井戸端会議がもたらす効

用が生まれ、地域への小さな貢献がなされると思われる。生活者としてのたくましい力は、研究者には予想もつかない成果を生むという、一例だろう。文化遺産が直接、間接に、復興を進ませ、あるいは媒介するという役割について理解し、これ等を支援する必要がある。

さらに少し検討領域を広げてみると、少子高齢化と集落の消滅などの問題も視野に入ってくる。しかしこれは様々な他の要素が絡んでおり、文化遺産分野だけで解決するには手に余る問題であるから、設定の仕方を間違えると、暗い話しか出てこないで袋小路に入り込む。従って、「活用」については、地域の歴史を掘り起こし記述し残す、そして次の時代に期待する、ここまでで良いのではないかと考えている。大きな問題なので別に項を改めて検討すべきことであろう。

最後になったが、襖の修理をはじめとして、様々な和紙文化財の修復の専門家である尾立氏の意見も、専門家としての襖の見方が示されていて、なるほど、と

納得させる。解体する時は、もう一度組み立てる場合と、解体で終わる場合があり、この特集で述べられている古文書を取り出す作業は後者である。このような視点も、大事にしたい。

註

(1) J・F・モリス他 <http://hdl.handle.net/10097/00129482> からPDFが入手可能。

なおPDFの一三二ページに「レジリエンスの根源は防災・減災計画そのものにあるのではなく、あくまでも人間集団とその「資源」にある、という違いである。つまり、英語原文では、文化遺産を単に守られるべき対象にしているのではなく、文化遺産を人々の生業、健康、社会経済的資源や生態系と并列に、災害時に守れば人々のレジリエンスを強化する源となり得るものとして明記されている。」とある(内田はレジリエンスを強靱性というより復興力、復元力と理解する)。